

稲作情報 No.3

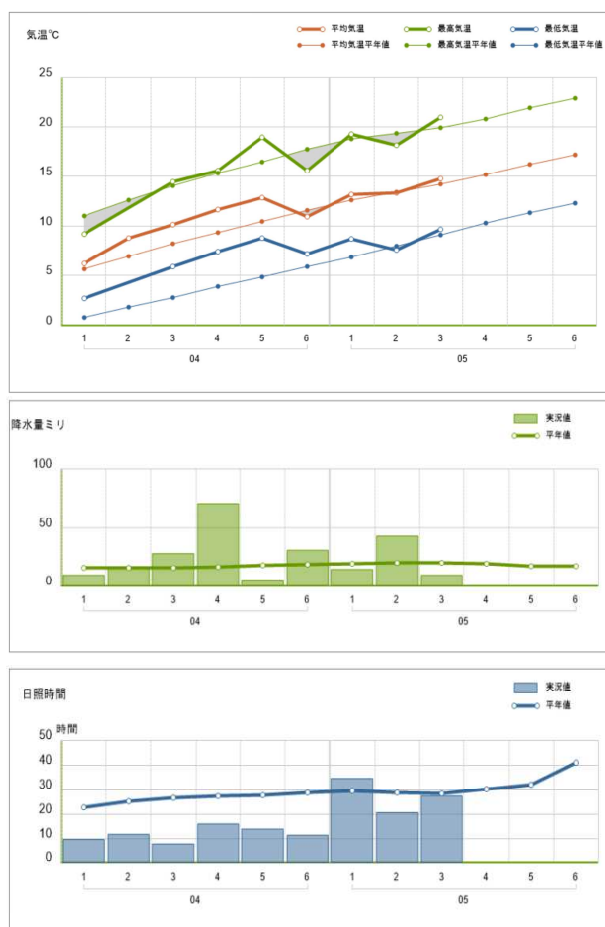
発行日: 令和7年5月16日
発行: 仙北地域振興局農林部農業振興普及課

～移植後は浅水で活着促進！異常還元に注意しましょう～

1 気象経過と今後の気象予報

これまでの気象経過(アメダス大曲)

図1 半旬ごとの気象経過(秋田県農業気象システムより引用)



向こう1か月の気象予報(5/18～6/16)

- ・仙台管区気象台より令和7年5月15日に発表された1か月予報によると、期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みです。天気は数日の周期で変わる予報です。
- ・平均気温は高い確率が60%で、週別の気温は1週目(5/17～5/23)が高い確率が80%、2週目(5/24～5/30)および3～4週目(5/31～6/13)は高いまたは平年並の確率がともに40%です。
- ・降水量は多い確率が40%です。

図2 東北地方 1か月予報(出典: 気象庁HP)

気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)			
気温	東北地方	向こう1か月 05/17～06/16	10 30 60
		1週目 05/17～05/23	10 10 80
		2週目 05/24～05/30	20 40 40
		3～4週目 05/31～06/13	20 40 40
降水量	東北地方	向こう1か月 05/17～06/16	30 30 40
日照時間	東北地方	向こう1か月 05/17～06/16	40 30 30

低い/少ない/少ない 平年並 高い/多い

2 気象概要および作業進捗状況

4月は低気圧や前線、気圧の谷の影響により曇りや雨の日が多くなり、降水量は多く、日照時間はかなり少なくなりました。また、気温は高く経過しましたが、降水量が多くなったことから場の乾燥が進まず、耕起作業は平年よりやや遅れました。

管内の播種作業(盛期)は4月24日(平年差早1日)で平年並となりました。

本年は播種後の日照不足により高温障害による出芽不良等は少なくなりましたが、換

気が不十分で加湿傾向となったハウスではカビによる立ち枯れ症状が確認されている他、一部では2葉期以降の苗でもみ枯細菌病の発病が確認されています。

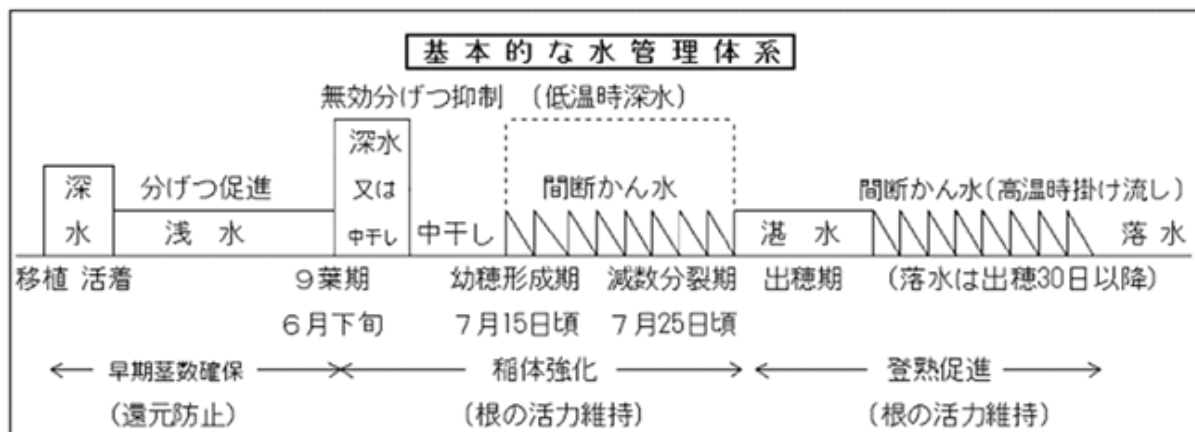
3 当面の技術対策

(1) 適期移植と栽植密度の確保

- 田植え作業は、日平均気温14℃以上（中苗）、できれば**最高気温が20℃以上の温暖な日**に行い、最高気温15℃以下の日や強風の時は避けましょう。
- 強勢茎主体に穂数を確保するためには、移植の際に田植機各部の調整を行い、株当たりの植付本数は稚苗では4～5本、中苗では3～4本とし、栽植密度は70株/坪以上、植付深は中苗で2.5cm程度とします。

(2) 活着を促進させる田植えと水管理

- 苗の活着（通常は4～5日で活着する）は気温、水温とも高いほど早くなります。田植え時期の水温は気温に比べて日平均で3～4℃高いので、**田植え直後は水深4cm程度として保温効果を高めるためできるだけ湛水状態**を保ちましょう。
- 活着したら分けつの発生を促すため、水深2～3cm程度の浅水管理とします。
- 田植え後に高温が続く場合には水温や地温が上昇することで、カナの発生や異常還元によるガス湧きの発生が助長されます。異常還元によるガス湧きの発生により、下葉の黄化や赤褐色斑点等の生育停滞を招くことから、除草剤・オリゼメート粒剤の効果を考慮しながら水の入れ替えや短期（数日間）の落水を行いましょう。



(3) 雑草対策 ～斑点米カメムシ類防除の第一歩は雑草防除から～

田植え後は**除草剤の散布遅れがないように早めの散布**を心がけましょう。ほ場内の雑草の種類と発生量に応じた除草剤を選択し、適期散布することで効果的な雑草防除を行ってください。

【雑草対策のポイント】

- 雑草の発生は代かき後から始まるため、代かきから田植えまでの期間が長くなると散布適期となる日数が短くなってしまいます。なお、代かきから10日程でノビエ2葉期に到達することから、代かきから10日後までを目安に初・中期一発剤を散布します。また、代かき後の気温が高く経過すると雑草発生の時期が早まることから、

状況に併せて計画的に除草剤を散布しましょう。

- 代かきから田植えまで10日以上かかる場合は、**移植後の初期除草剤と初・中期一発剤の体系処理を検討**してください。
- 除草剤散布時の水深は粒剤では3～5cm、フロアブル剤・顆粒水和剤・ジャンボ剤・少量拡散型粒剤（豆つぶ剤）では5～7cmとし、薬剤が拡散しやすい水深を確保しましょう。
- 除草剤散布後7日間は必ず止水**を行い、排水路への落水やかけ流しは行いません。除草剤散布後の降雨によるオーバーフローにも注意しましょう。

(4)本田のいもち病防除対策

【耕種的防除】

- ほ場に放置された補植用の余り苗は、葉いもちの強力な伝染源になる**ため、田植え終了後は、速やかに水田の泥の中に埋めるなどして完全に処分してください。
- 乾燥状態で越冬した稲わら・粃殻は、葉いもちの伝染源となるため、ほ場周辺に放置せず、適切に処理してください。

【薬剤による葉いもち防除】

- 葉いもち防除剤は、箱施用剤、側条施用剤、水面施用剤のいずれかを使用します。
- 水稻育苗終了後のハウスに野菜類を作付けする予定があり、箱施用剤を移植前～当日に使用する場合は、育苗ハウスの外で薬剤を使用してください。
- 箱施用剤の箱当たり散布量が25gとして使用可能となるのは、10a当たりの使用育苗箱数が20箱以上の場合です。復元田等では窒素供給量が多くなり、いもち病に対する抵抗性が低下する恐れがあるため、箱当たり散布量は50gとしてください。
- 農薬使用にあたっては、ラベルをよく読み、使用基準を確認してください。
- 秋田63号や飼料用米でもいもち病の発生が見られますので、必ず薬剤防除を行ってください。

※農薬のラベルは必ずよく読み、使用基準を遵守しましょう

「春の農作業安全運動」実施中！

令和7年4月20日～5月31日

～秋田米栽培情報発信LINE始めました！～

水稻栽培に関する情報を発信しています。

秋田県農林水産部水田総合利用課

<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/genre/suiden>



友達追加は
こちらから